

旧藩時代は岡藩に属し、藩主中川氏は宇目代官を酒利  
において、宇目郷四千石を支配していました。明治二十  
二年町村制の施行にともない、大野郡小野市村・重岡村  
となり、更に、昭和二十五年行政区画の変更によつて、  
南海郡郷に編入されました。

昭和三十年、町村合併促進法の施行により、合併して  
宇目村として発足、同三十六年宇目町となりました。  
宇目郷は、古来、日向・豊後の交通の要地であり、史  
跡も文化財に富む土地極です。  
(以上)

### 踏査記

畑の浦の古塔を尋ねて

―清水庵や福泉寺のあたりを歩く―

宇目町・会員 軸 丸 勇

### ① 畑の浦

晩春のある日、私は友人塩月君の宅へ久し振りにお伺  
いした。そして古塔について聞いて見た。ところろがさつ  
ぱり要領を得ない。古塔と、刀の古刀と間違われ、珍問  
続出である。

はじめの計画では、富沢氏を訪問するつもりであつた  
が、浦に来て見ると、皆さん自分自分のお仕事に精出し  
ておられる。富沢氏を突然にお訪ねをしては、迷惑とお  
かけするばかり、いい歳をして、なぜ前以て電話位して  
おかなかつたのかと思つたが、後の祭り。ええままだ  
ここまで来て引き返すでもないので、電話をかけるだけ

でもと思つて電報したら、幸いご在宅である。来意を告  
げると、ご多忙中にもかかわらず、こころよくご案内さ  
引き受けて下さつた。

### ② 清水庵

まず畑の浦の史談会が中心になつて復旧建築をされて  
いる清水庵へ。

畑の浦峠を下りきつたあたり、橋の所から東に海岸に  
向つて行つた所、小十女十字路で車を降りた。左手崖が  
そび立ち森の見えるところが目指す清水庵で、復旧工事  
のためトラックの通る広い路が出来ている。富沢氏  
のお話によれば、工事が終わればまた元の石段道に修復す  
るとのこと、路のはしに青ごけのついた石段が積んで  
ある。

ものの五十米も登ると、新しい墓地が道の西側に見え  
る。河野水軍一族の末裔の墓であるという。その新しい  
墓にまじつて、室町時代かと思われる五輪塔が散見され  
る。目指す清水庵はすぐそこであつた。

### ③ 大岩壁

取り払われている清水庵の敷地に立つて見上げると、  
頭の上は大岩壁が、なまぐさ者の私を見守るかのよう  
にせまつてゐる。高さ約三十米もあるのか。垂直に切り  
立ち、おずかに山すそが手前に傾斜してそそり立ち、そ  
の一番高いところが瀧の落ち口らしく、白糸のように水  
しぶきとどばしなから落下している。その下に立つと、  
何か岩に押しつぶされでもするかのやうな威圧感さえう  
ける。岩壁の烈しさ、水の憚らしさが、ひしひしと迫つ  
て来る。

宇宙時代に生きる我々であるが、生身の人間として、

この岩壁に向つて立てば、昔の人と少しも変わってない気がする。岩と水は、直截的に人間の心の奥に迫るものがある。大岩壁の下に立ち瞑目すれば、堂塔の立ち並んだありし日の清水庵が彷彿として秘裏さかすめる。

④ 板碑と五輪塔

清水庵の手前、道の上岩壁の下にちよつと一左段があつて、十数基の古墓が並んでいる。その中に三基の板碑がある。頂部を山形にし、肩に二線の切込みをしつらえ、その下に額部を造り、空間を身部としている。この三基の板碑は頂部は整っているが、二線の切込みが弱く浅い。また身部の彫りも弱く、普通ある襷子や銘文はないが、板碑であることには間違いない。

一番左にある五輪塔は、各輪別々に転っているが、まず水輪からいえば、押しつぶされたような球形で安定感がある。この形は、室町時代前期頃までに造立された塔によく見受けられるが、地方差があるのではっきり言えない。火輪は軒がちよつと厚さき欠き、反りはまっ直ぐに近く、小形ながら雄揮を反り具合と示し、軒端の縁はほとんど垂直に切られているようでもあるが、少く斜縁となつて、僅かに内側に流れている気もする。

空輪・風輪は、ちよつと時代が下つていようように見受けられる。たぶん「後家おあせ」かと思う。以上を総合して、室町前期の造立かと思われ。

⑤ 一石五輪塔

元米五輪塔は、各輪別々の石で造られるへ空風輪はほとんど一石のものであるが、一石五輪塔は空の示すとおり、一本の石で造られている。塔高はせいぜい五、六十センチから九十センチ(約三尺)までで、一石を越える一石五輪は見えない。

となく、書物にも出てないようである。

豊後路には一石五輪の数は極くおすかで、それも江戸時代造立のものかほとんどである。そして普通の五輪塔に見える、どつしりとおちついたあの風格はなく、造形美的な、墓地の装飾品といった感じである。

仏教が一般に大衆化され、上層部の人達は普通の五輪塔、一般の人達には一石五輪塔が造立されたようである。鎌倉時代から盛んになり、造塔の功德は大無辺と信ぜられ、室町時代が全盛期で、江戸時代では中期寛文頃まで、其の後ほとんど墓地の装飾品となつたようである。

畑の浦では四基ほどの一石五輪を見ることが出来た。いずれも江戸後期のもので、火輪の軒が長く上に伸び、空笠印塔の隅飾のように外側に向つて反り、空輪の頂上かするどくとがり、正に石造美術品である。

⑥ 福泉寺下の古塔

福泉寺の下の古い墓地には、高さ二尺五寸の塔位の立派な御影石の五輪塔が四基ほど、あたりをへいげいするかのようになり、どつしりとまえてい。

その右の方に山里ではお目にかからない石室五輪が、長い年月の風化と戦いながら、いひとつと人間の生活をみつめてい。地上から屋根まで二五の塔位、軒は二重垂木を彫り、屋根の反り具合など時代をよく反映している。江戸時代特有の軒先の縁の反り、軒は薄く伸んでいて、ちよつと見ればコンクリート造りと思わせる。

石室は興行が七の塔位、その正面に五輪塔が平たく陽刻されている。石室の中だけに風化もなく、静寂そのままである。しかし観音びらきのとひらは、さすがに長年月の風化に耐えきれず、破片となつてその附近に散らしている。

⑤

これらは、自他平等の仏教思想を理念とし、現世安穩後世安樂を願って、故郷を遠くはなれた阪神の地へ交易におもむき、多額の金品を投じて、海上はるばると購入したものと思われる。当時九州では御影石は、一般庶民にとつては高級品であり、高嶺の花であった。そんな時代であった。

既、鹽や畑のすみへこは、無羅作に積み上げられた墓石の中にも、五輪塔婆らしい姿をした古塔が、ちよこざんと頭を出している。よそではあまり見かけない格好の石造品が多い。交易が盛んであった畑の浦の歴史がしのばれる。

後日また再訪、あらためて調査したいものである。  
(おわり)

研究

直川村竹ノ下の供養塔

「大乗妙典一石一字漸写塔」について

会員・直川文化財調査委員 休石 博 美

○ 開書 供養塔物語

伝えられる物語りに、昔祖柱蔵司という人あり。若き日何の因縁か悪の道に入り、親は涙をもへて説諭すれども空しく風、愛の鞭も効き目なく、親の心をかえり見ず、悪業は益々深まるばかり、ついに捕われの身となつた。

数年の後放蕩となり、人の心は善なるものか、父恋し母恋しやと帰って見れば両親はすでに此の世の人でなく、斬は傾き壁は落ち、屋敷のまわりは草叢となり、ただ茫然と涙にくれて立ちつくすのみであった。

や、あつて氣をとりなおし、今は亡き両親におわびすることと思ひ立ち、両親の追善供養こそ親不孝のついでな

いと心なきめ、お城下の養賢寺の門をたいてさんげし又仏の弟子となり、念仏三昧仏道に精進の日々を送ることとなった。いくばくもなく修業も進み、ここ上直見村竹の下鬼越(おんろぎ)の庵寺に住むこととなり、ここで終生を過ごしたという。

その晩年、父、一空常実信士、母、理陽妙智信女の菩提を弔つて、程近い丘のほとりに供養塔を建てることとし、身ときよめ、香をたきつつ法華経をとよめながら、一石一字の漸写をなしとげ、願成寺第四世仁愛和尚にその銘文をお願ひ申したと伝えている。この庵主がはじめに書いた祖柱蔵司その人である。

歲月は流れて二百七十年、今尚、桃石山の麓近く、樹林のうすぐらい所に、この供養塔は静かに建っている。そして鬼越の庵寺趾には建物こそなけれ、墓石も宝篋印塔などが、おびしく散らばって残っている。

○ 採録 供養塔銘文

(所在地 直川村上直見竹の下焼石)

大乗妙典一石一字漸寫

經謂大乗妙典者經中王也 誠哉  
一切衆生開式句一偈 成佛  
人而朝宗之時 悉皆無不作佛善  
千  
祿聖之後州海部郡佐伯莊龍鼎山養  
賢派下之祖柱蔵司 柚丹悃為有父

